

Hondaの交通安全情報紙



Since 1971



Safety for Everyone

Hondaはすべての人の交通安全を願い活動しています。

●編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内 〒107-8556 東京都港区南青山2-1-1 TEL 03(5412)1736 http://www.honda.co.jp/safetyinfo/

●編集人：吉田宏樹

※年間購読をご希望の方は、下記までお問い合わせください。(株)アストクリエイティブ 安全運転普及本部係 TEL 03 (5439) 1191 E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp



SJホームページは

CONTENTS

- 特集①：子どもへの交通安全教育 楽しみながら安全意識を高め、「止まる」「観る」を実践してもらう……①
特集②：シリーズ・高齢者への交通安全教育 第1回 歩行者編 高齢歩行者の道路横断中の事故を防止するために……④
現場訪問／視覚障がい者自動車運転体験……④
TOPICS①／クミ化成(株)……④
TOPICS②／第13回全国自動車教習所教習指導員安全運転競技大会……⑤
TOPICS③／社会福祉法人 別府リハビリテーションセンター……⑤
NEWS REVIEW／平成24年度国際交通安全学会研究調査報告会ならびに学会賞贈呈式……⑤
STREAM／全国に広がるHondaの高校生交通安全教育活動 第1回……⑥
危険予測トレーニング(KYT)／見通しの悪い交差点を横断する時(子ども編)……⑦
指導者ファイル／尼崎市総務局生活安全課の皆さん……⑦
SJクイズ……⑦
DOCUMENT EYE ②／「ゾーン30」に指定された道路を走行する車両を観察する……⑧

特集①：子どもへの交通安全教育
楽しみながら安全意識を高め、
「止まる」「観る」を実践してもらう



多古町立久賀幼稚園の交通安全教室には園児12名とその保護者が参加

平成24年の歩行中の交通事故死傷者数を年齢層別にみると、高齢者(65歳以上)の次に多いのは子ども(15歳以下)である。こうした状況の中、次世代を担う子どもの安全意識を高めるための取組みが全国各地で実施されている。今回は、そうした事例を紹介しながら、子どもたちに何を伝えるべきか探る。



5月21日、千葉県多古町にある久賀幼稚園で、同園の園児とその保護者を対象にした交通安全教室が開催された。多古町では「ベコちゃんクラブ」という幼児安全クラブを基本に、幼稚園・保育所単位で交通安全教育を年6回行っている。この日はその第1回ということで、園児とともに保護者も一緒に参加。多古町役場総務課交通防炎係の林智子さんが指導を担当した。



パネルの中に隠れているひよこのイラストを園児に見つけてもらう(写真上)。「あやとりい ひよこ編」の「音当てクイズ」に取り組む親子(写真下)

この後、園児も加わり、交通安全教室がスタート。テーマは「よく観る」「よく聞く」。園児に目を閉じてもらおうと、林さんはパネルに貼られた花や木などのイラストの中に、ひよこのイラストを隠す。そして、園児たちに目を開けてもらい、見つけてもらう。ひよこに似た形のイラストも混ざっているの、注意深く

交通安全は家庭から！
保護者の気づきを促す

林さんは、最初に保護者だけを集めて講話を行う。まず、子どもと大人の視界を比較し、「大人には見えるクルマが、子どもには見えていないことがあるので、注意してほしい」と説明。チャイルドビジョン(幼児視界体験メガネ)を使って、保護者自身に子どもの水平視野と垂直視野の違いを実感してもらう。そして、子どもと一緒に道路を歩く時の注意事項について、「子どもの手首をしっかりと握って、大人は車道側を歩きましょう。道路を横断する時は、「ちょっと、止まって、右・左・右」を実践してください」と強調した。



園児の保護者に講話を行う多古町役場の林智子さん

観なければならぬ。「道路を歩く時も、自分の目でクルマをよく観てくださいね」と園児に伝えた。続いて「観ることと一緒に、聞くことも大切です」と、Hondaの交通安全教育プログラム「あやとりい ひよこ編」の中にある「音当てクイズ」を始める。交通場面のイラストを親子に配り、「これから聞く音がイラストのどこに当たるか、探してください」と、様々な音を順番に再生する。「クルマの急ブレーキの音」が流れると、「どうしてクルマは急ブレーキをかけているのかな？」と問いかける。園児たちがイラストを見て「ボールを追いかけて、飛び出したから」と答えると、「道路への飛び出しはとても危ないので、絶対にしないでください」と、林さんは注意を促した。
この日は、最後に幼稚園の周辺道路を親子で歩いてもらう。ここでは、香取警察署の石井英明さん、川音隆幸さん、近藤智明さん、多古町交通安全協会の諏訪君江さんと三宮豊子さんが林さんをサポート。コースの途中に立って、園児と保護者にアドバイスを行う。そして、道路を横断する時は、親子で「ちょっと、止まって、右・左・右」を確認した。
参加した保護者からは「普段はクルマで移動しているの、子どもと手をつないで道路を歩くというのはとても新鮮でした」「私たちが歩いている横を大きなトラックが猛スピードで走っていくのに驚きました。その時の風圧や音を子どもと一緒に体感できた点良かったと思います」という声がかれた。また、「子どもなりに交通安全のことを理解している様子を見て、頼もしく思いました」「町役場をはじめ、警察や交通安全協会の協力もあり、地域全体で子どもを守っていくという一体感を感じることが

※あやとりい＝Hondaが鈴鹿市と協力して開発した交通安全教育プログラム。4～5歳児対象の「あやとりい ひよこ編」、小学3～4年生対象の「あやとりい、幼児～小学校高学年対象の「あやとりい 自転車教室」、高齢の歩行者・自転車利用者対象の「あやとりい 長寿編」がある。あやとりいは「あんぜんを やさしくときあかし りかいて いただく」の略。詳細は以下ホームページを参照。 http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatorii/

特集①:子どもへの交通安全教育

地域が一体となった交通安全教育

多古町の幼児・児童への交通安全教育は林さんが一人で担当している。「安全確認などを臨場感のある中で学んでもらうことが、子どもたちには効果的だと考えています。しかし、幼稚園外の道路を歩く実習などは、私一人ではできません。そこで、警察や交通安全協会にも協力をお願いし、このような形で行うようになりました。子どもたちが警察官の方を身近に感じるこ

できました」と、「ベコちゃんクラブ」の交通安全教育は保護者に好評である。「交通安全は家庭から」と林さんは保護者に訴えている。「私たちが伝えたことを家庭でも守っていただくことが、たいへん重要です。今回のように子どもと一緒に歩くことで、保護者の皆さんにも新たな発見や気づきがあるはず。そうした経験を積み重ねて、親子で交通安全意識を高めていってほしいと思います」。

多古町では交通安全教室の「出席カード」を用意し、受講するたびにシールを貼って子どもに渡している。「子どもにはカードを保護者の方に見せて、何を学んだのか話すように伝えます」と林さん。カードの中には通信欄が設けられており、そこに保護者が受講後の子どもの様子などを書いて、幼稚園・保育所へ提出することになっている。これも子どもを通して、保護者の交通安全への関心を高め、地域ぐるみで交通安全教育に取り組むための工夫といえる。



交通安全教室の最後は幼稚園の周辺道路を親子で歩く。車道は大型のトラックなどの往來があった(写真上)

警察や交通安全協会の協力を得て、年6回にわたり交通安全教育を実施(写真下)



「出席カード」の通信欄を利用して保護者とのコミュニケーションを図る



多古町役場が小学校入学前の子どもに配付している「歩行者免許証」



児童にも参加してもらい、クルマは急に止まれないことを示す

ができる良い機会にもなっているようです」と林さんはいう。

こうした「ベコちゃんクラブ」の交通安全教育を受講した子どもには、小学校入学前に顔写真入りの「歩行者免許証」が配付される。これは「免許証を持つことで、交通社会人としての意識を持つてほしい」「幼稚園・保育所で学んだことを、小学生になっても継続してほしい」という目的で、林さんが発案したものである。小学校入学後は、ランドセルの中に入れて携帯してもらうそうだ。

止まって観るという重要性を伝える

茨城県つくば市も子どもへの交通安全教育に力を入れている自治体の1つだ。今年度から交通安全教育指導員を2名から4名に増員し、市内の交通安全に取り組んでいる。5月9日には、つくば市立竹園東小学校で、交通安全教室が開催された。つくば市交通安全教育指導員の廣瀬明子さん、大川初江さん、富田幸智子さん、岩村加奈子さんが小学1〜3年生(332名)には「あやとり」を使った歩行者教育を、小学4〜6年生(337名)には「ホンダ自転車シミュレーター」による自転車教育をそれぞれ行った。

廣瀬さんは「今日は、みんなが交通事故に遭わないように安心して道路を歩けための約束を勉強します」と1〜3年生向けの交通安全教室を始める。「クルマのドライバーさんは道路を横断している人を見つけた時、すぐにクルマを止めることができず、どうしようか?」と児童に問いかけると「止められない!」と声が上がると、「これなら、なぜ止めることができないのか実験をやってみます」。児童の代表者2名が前に出る。一人は体育館の端から端に向かって走り始め、廣瀬さんが笛を鳴らしたら止まる。そして、もう一人の児童には笛が鳴った時に走っている児童がいた地点に立ち止まらう。2人の位置の差を測り、笛が鳴った地点と、実際に止まれた地点には約3mの差が生じていることを児童全員で確認。

「みんなが急に止まれないように、クルマも急に止まれません。この差は50km/hのクルマの場合、約32mになります」と廣瀬さんは道路への飛び出しの危険性を伝えた。この後も、廣瀬さんは2つの実験(写真下参照)を行い、「止まる」「観る」ことの重要性をわかりやすく示した。

児童が受講する様子を見守った竹園東小学校の杉田慶也教頭は「あやとり」は講話だけでなく、画像や実験を交えているので、小学校低学年の児童にも理解しやすい内容になっていました。交通安全は児童の生命にかかわることですから、当校でも力を入れています。後日、近くにある交通公園を利用して、児童に身体を動かして今日学んだ「止まる」「観る」を実践してもらいます」と話す。

指導を担当した廣瀬さんは「子どもたちには「止まる」ことがいかに重要かを理解してもらい必要があります。『あやとり』はそれをわかりやすく伝えるプログラムだと感じ、今年度から交通安全教室の中に取り入れています。子どもたちの視覚に訴える構成になっているので、使いやすくと感じました」と、「あやとり」による指導の成果を語った。

このように、子どもの交通安全教育においては家庭、学校、地域ができるだけ多くの機会を設け、参加体験型の要素も加えながら子どもの安全意識を高めることができる教育手法を取り入れていくことが重要だといえるだろう。

●2つの実験



「止まる」ことの重要性を伝える実験。大型スクリーンの中でイラストを動かして、何が描かれているかを児童に問いかける。イラストの動きを止めれば、イラストに書かれた数字まで正確に読み取れることを伝え、自分が動きながら観るよりも、止まって観るほうがよく観えることに気づいてもらう



見通しの悪い場所には見えない危険があることを伝える実験。交通安全教育指導員の廣瀬明子さんが筒の中にボールを入れて、ぬいぐるみに向かって転がす。児童は気をつける姿勢でぬいぐるみの前に立ち、ボールが筒から出てきたら、ぶつかる前にぬいぐるみを取り上げてもらう。しかし、筒の中は見えないようになっているため、ボールはぬいぐるみにぶつかってしまった(写真上)。筒の中を見えるようにすると、ボールが筒から出た後すぐにぬいぐるみを取り上げることができた(写真下)

「かるた」を活用した交通安全教育



を理解してもらえと考えました」と話す。かるたは逗子警察署友の会から寄贈を受けたという。

各小学校で1〜6年生20〜40名が参加。かるた取りを始める前には、逗子警察署交通課の川下綾華さんが大判かるたの絵札を見せながら、子どもたちに歩行中・自転車乗用中に守るべき交通ルールを説明。川下さんは「守ってほしいルールが、5・7・5の読み札を通して子どもたちの耳にリズムカルに入っていく点が良いと感じました。子どもたちにも好評です」と「交通安全かるた」を使った感想を語ってくれた。



「Honda交通安全かるた」大判セット(定価2万円・税込)および普通サイズ(定価500円・税込)の詳細や購入方法などは以下のホームページを参照。
<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/karuta/>

家庭や学校などで、より気軽に交通安全に親しんでもらおうと、平成21年に発売されたのが「Honda交通安全かるた」である。発売以降、遊び心のある交通安全教材として地域の指導者に活用されている。かるたで遊びながら、「正しい交通行動」や「命の大切さ」について学べるようになってきているのが特長だ。

神奈川県逗子警察署では、今年1月から2月にかけて、逗子市内の5つの小学校の「ふれあいスクール」(市立小学校の教室を活用した放課後の遊びの場)で「交通安全かるた大会」を実施した。逗子警察署の寺島武美交通課長は「通学中の小学生が事故に遭わないよう、子どもたちの交通安全に対する意識を高めていく必要があります。かるたを活用することで、楽しみながら、子どもたちに交通ルール